

教育研究所だより

令和7年(2025年)

1月号

(通算256号)

き どう

# 輝動

(きどう：子どもが輝き、躍動するまち)

近江八幡市教育研究所

TEL0748-36-5574

FAX 32-3352

メール

044800@city.omihachiman.lg.jp



## 輝け!

近江八幡市立八幡中学校校長

五嶋 弘道

令和5年4月から近江八幡市立八幡中学校に校長として赴任し、2年間に過ぎようとしています。実は、20年ほど前にも八幡中学校に教諭として8年間お世話になっていました。こうして校長として赴任した時には、懐かしさと共に重い責任を感じました。八中に再度赴任して思ったことは、20年経っても学校の校訓は『切磋琢磨』で、生徒はこの合言葉のもと仲間と共に磨きあっていました。生徒会活動が活発で、生徒会の日刊新聞である「輝け!八中 みんなの学校」は8000号を突破していましたし、学習や運動にメリハリをつけてがんばり、三人行事の体育大会・文化祭・合唱コンクールで学校を盛り上げていこうとする姿も同じでした。その当時、私は中堅教員である程度経験もあり、学校をよくするために働いていこうと意欲を持っていました。学年の経営や生徒指導、部活動とどれも自分なりに力を入れ、生徒の主体的な活動を重んじ、自分から様々なことに積極的に動くことを常に考えていました。生徒による主体的な活動を促していくことは、教育課程や働き方を考えた時にはたいへんなこともあります。得るものはとても大きく、生徒、そして学校が「輝く」原動力となります。これからも大切にしていきたいことです。

また、学校運営協議会・コミュニティセンター・地域の商店や事業所・寺社・公共施設などのいろいろな方に出会うと、あの当時からお世話になっていた方がたくさんいらっしゃいました。中には元八中生で私の教え子にあたる人が、もう大人になられて保護者や地域の一員として活躍されており、その子どもさんを八中でお預かりするということもあり、「あー、あの時の!」と驚いたことが何度もあり、感慨深いと同時にやはり「つながり」は大切だなと再認識させられました。笑顔で「あいさつ」や相手の方に「思いやりを持って対話する」、やるべきことは「一生懸命やる」など、続けてきたことが後に何かの形で返ってくる、そして、八中は地域の人々に愛されて育って歴史を紡いでいることも感じました。学校は地域のシンボルであり故郷であり、かけがえのないものだという考えが私たち教職員には必要であり、できるだけ地域の方々と交わり学校への理解を深めていただくことも進んで行っていかなければならないと思います。これからも近江八幡市内の保幼小中高が連携し地域と共に支え合い、輝きを放っていくことを願っています。



# 令和6年度（2024年度）近江八幡市教育研究発表大会

【日時】令和6年12月25日（水）13:30～16:30

【場所】安土文芸セナリヨ

【大会テーマ】「子ども」が輝き「人」が学び合い ふるさとに愛着と誇りをもち 躍動する 元気なまち 近江八幡  
～元気と笑顔の合言葉「早寝・早起き・あさ・し・ど・う～

## 開会行事

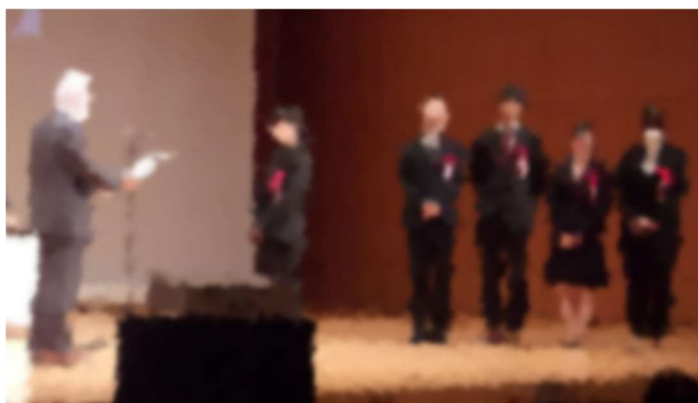


教育長挨拶



近江八幡市教育会会長様、滋賀県総合教育センター次長様、高島市立教育研究所参与様、近江八幡市PTA連合会会長様、市教育委員の方々に出席いただき開会行事を行いました。

## 教育研究奨励事業 表彰式



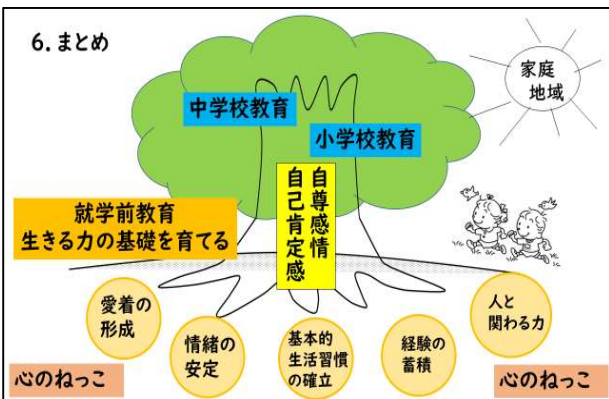
今年度は、15名の皆様が表彰されました。教育長から教育研究奨励賞が贈られました。

また、副賞を近江八幡市教育会より贈呈いただきました。

おめでとうございます

来年度も、奮ってのご応募を  
お待ちしております。





## “楽しい” “やってみたい!”と心を動かし、意欲的に遊ぶ幼児を目指して

～子どものやりたい気持ちや友だちとの関わりを育む環境や教師の援助とは～



馬淵こども園 教諭

### 【参加者の感想】

子ども一人一人の気持ちに合わせた保育者の関わりや環境の構成が、“やってみたい”という意欲や今後の学習意欲の根っこになるのだということがよく分かりました。

### 【参加者の感想】

学びに向かう力を遊びの中で発揮できるよう環境調整し、子どもの言動をしっかり見取っていくことが大切だと感じました。

### 【参加者の感想】

すぐに答えや成功を求めないかわりか、その子の興味・関心を引き出し、生き方を肯定しているもので良いなと感じました。

子どものやりたい気持ちが湧き起こるよう「素材」「自然」「道具」「仲間」の4つの視点に着目し、環境づくりや援助を行いました。

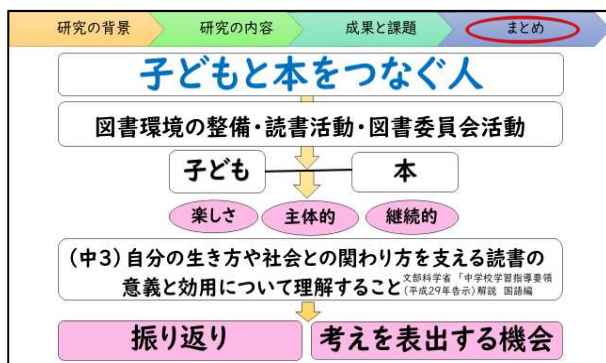
例えば、スライム(素材)を触ることが苦手なA児が、安心してスライム遊びができるようにビニールの袋(道具)を用意しました。すると、最初は遊びに参加しなかったA児がビニール袋の上からスライムを触り、スライムの感触を確かめていました。最後には「袋から出して」と自分から教師に伝え、直接スライムを触ることができるようになりました。今では、スライム遊びはA児の大好きな遊びになりました。教師が個々のペースに合わせてタイミングよく関わってきたことで、A児が「やってみたい!」と心を動かし、友だち(仲間)と意欲的に遊ぶ姿につながりました。

子どもの姿を丁寧に見取り、その子に合わせた「個」の支援を行うこと、環境を整えることが大切であると感じました。

## 本に親しみ楽しむ子どもの育成

～つながる読書をキーワードにして～

教育研究所 研究員



### 【参加者の感想】

読書環境を充実させることで子どもたちの「知りたい」「分かってほしい」という意欲を刺激し、自ら学ぶ姿勢になっているなと感じました。

### 【参加者の感想】

1年間のカリキュラムを通して、ねらいをもって読書活動の位置付けを行うことで、子どもが読書に親しむ姿の深まりが確実に現れることが分かりました。

「生き抜く力」の礎の一つとして重要な「読書」に子どもたちが親しんだり、楽しんだりできるように「つながる読書」をキーワードに研究を行いました。教員・学校司書・図書館司書・図書委員会の児童生徒といった子どもと本をつなぐ人が、図書環境の整備や読書活動、図書委員会活動に取り組むことで、本を読むことに楽しさを感じる子どもが増えました。その結果、学級文庫の本を読んだり学校図書館へ行ったりと自ら本とつながり、「もっと本を読みたい」と読書を継続する姿につながりました。

今後は、子どもたちが「読書をする意味」を実感できるように読書活動を通して身に付けた力を「振り返る時間」やビブリオバトルのように読書を通して「感じたり考えたりしたことを表出し、他者と交流する機会」を作っていくことが必要だと考えます。

## 講演

# 「生きる力から生き抜く力への育成 ～VUCAの時代に～」

京都精華大学前学長／京都精華大学全学研究機構長  
人間環境デザインプログラム教授 ウスビ・サコ氏

京都精華大学全学研究機構長のウスビ・サコ氏にご講演いただきました。講演の中で教えていただいたことをお伝えします。

### ◎ 答えを教えない大切さ

・今の教育は、端的に正解を早く見つけた人が賢いという捉え方が主流



・答えを教えないことが大切。子どもの「問い」と「答え」の間には「無数の好奇心」がある。その好奇心を大切にすることが必要。



・対話を通して行う授業を!子どもたちが「問い」を立てる力を育てる。



### ◎ 「自分」と向き合う

・日本では…

「違い」や「差」をよくないこととして捉えている。



・互いの「違い」を意識し、「違い」をポジティブなものにしていく。



・「自分の当たり前と他者の当たり前は違う」=他者と出会うことで自分を再発見する。

・子どもたちが、「自分は何者か」自分を見つめる時間を確保することが必要。⇒ **自分の軸**



### ◎ 教員の役割

・子どもたちに「失敗は怖くない」ことを伝える。人は失敗するものであり、その失敗を受け止め、そこからいかに回復していくかが問われる。

・子どもたちは、自分の話を受け止めてくれる大人を求めている。子どもの考えをじっくり聞くことが大切。

・子どもを「個」としてみる。



年末のお忙しい中、研究発表大会にお越しいただきありがとうございました。



## 研修報告

### 第2回市中堅教諭等資質向上研修

日時: 11月19日(火)

場所: 武佐コミセン

- 「生徒指導について」
- 「児童生徒理解と不登校について」
- グループ協議

「生徒指導について」では、中堅教諭として①情報の収集と伝達を円滑に進めるためにネットワークを作ること、②若手教員と一緒に聞き取りや家庭訪問などを行うこと、③幼保小中の教員とつながることの大切さを教えていただきました。

「児童生徒理解と不登校について」では、不登校児童生徒の現状やにこまるルーム・にこまる訪問での子どもたちの様子を知りました。「先を考えながら、今を支援」できるように組織で動くことの重要性を学びました。グループ協議では、「不登校」について改めて考えました。校種を超えて意見を交流することで、新たな考えを知ったり、学んだりすることができました。

